



釧路炭田の歴史



1940年代後半の坑内（太平洋炭砒）



バウムジグ選炭機（太平洋炭砒）



日本の主な炭田と
釧路炭田の位置



世界に先がけ太平洋炭砒で実用化された
「SD採炭方式」（長壁式採炭）

1 北海道最初の石炭採掘

釧路炭田における石炭の記録は、江戸時代、松前藩主であった松前邦広の子である長広が著した「松前志」（1781年）が最初です。その後、石炭採掘は江戸時代末期の開国によってはじまります。開港した函館に寄港する船へ、薪や水、食料とともに石炭を供給するためです。1856年に釧路市内（瀬津内／現在の益浦）で採炭を開始、翌年からはシラヌカ（現在の白糠町）の石炭岬へ移動し、その後7年間、本格的な採炭が行われました。



「瀬津内」の石炭露頭

2 近代的炭鉱のはじまり

釧路炭田における本格的な近代的炭鉱は、1887（明治20）年に開坑した、安田善次郎（安田財閥）による「春鳥炭山」（安田炭山・春採炭鉱）からはじまりました。釧路の北方約70kmにあるアトサヌプリ火山（弟子屈町）の硫黄を製錬・輸送するための燃料として、石炭が必要になったためです。

20世紀に入ると、製紙工場など近代的産業が多く立地し、また釧路を起点に鉄道が延びていきます。地域内での石炭消費だけでなく、釧路港に出入りする船舶への供給、さらに京浜地区への移出なども増えていきます。



1905（明治38）年に完成した「安田炭山第一豎坑」

3 実業家・木村久太郎と台湾五大財閥・基隆顔家

1895（明治28）年の日本の台湾領有後、多くの日本人が台湾へ渡りました。鳥取県出身の実業家、木村久太郎もその一人です。台湾の鉱山業に従事した木村は、後に台湾五大財閥に数えられた基隆顔家の顔雲年がパートナーとなり、1912（明治45）年から共同で久年炭鉱を開発しました。1916（大正5）年に木村鉱業を設立した後、台湾へ進出した三井鉱山と共同で1918（大正7）年に基隆炭鉱を創業しました。



木村久太郎



木村組炭鉱時代の坑口

また木村は北海道の釧路にも着目し、1917（大正6）年に休山中だった春採炭鉱を買収し「木村組炭鉱」とします。1919（大正8）年には台湾の木村鉱業を基隆炭鉱へ売却し、釧路炭田の開発に専念します。1920（大正9）年には釧路へ進出した三井鉱山の別保炭鉱と合併し、太平洋炭鉱を創業して木村は初代社長に就任しました。台湾と同様、釧路でも木村は三井鉱山と共同で炭鉱を経営したのです。なお顔家も、木村の縁故で太平洋炭鉱の株を保持して、太平洋炭鉱の経営に参画しています。

4 台湾と釧路での三井鉱山技術者の活躍

三井鉱山は1889（明治22）年に三池炭鉱の払い下げを受け、1895（明治28）年に山野、1900（明治33）年に田川といった筑豊への進出を果たし、大正年間には次なる北海道や台湾へ目を向けていました。その足がかりとなった人物が、木村久太郎と顔家でした。台湾と釧路の炭鉱に三井鉱山が加わることで、当時の最先端の技術が技術者らによって導入されました。

「日本三大豎坑」と称された筑豊・三井田川炭鉱の伊田豎坑開削工事で中心的な役割を担った技術者のうち、小林寛は田川から台湾へ、田邊儀助は釧路へ渡ります。木村・顔家と三井鉱山の共同経営で誕生した基隆炭鉱と太平洋炭鉱は、筑豊・田川の経験が小林と田邊によって活かされたことで、当地で最大規模の炭鉱へと成長します。



小林 寛



田邊 儀助

5 釧路炭田の本格的開発

太平洋炭砒が創立された頃、1919（大正8）年には芝義太郎らにより北海炭砒鉄道が設立され、山あいにある雄別（現釧路市阿寒町）で炭砒開発に着手、1921（大正10）年に生産を開始します（1923年に三菱炭業が買収、「雄別炭砒鉄道」となる）。

この時期から戦後にかけて、太平洋炭砒・雄別炭砒鉄道・明治炭業といった大手炭砒会社と、その他の中小炭砒により釧路炭田は活況を呈します。なお、太平洋戦争末期は船舶輸送が困難になり、釧路炭田の各炭砒は休坑・保坑となり、労働者の約3分の2が三井田川や三池など九州の炭砒に単身移動した、という歴史もあります。

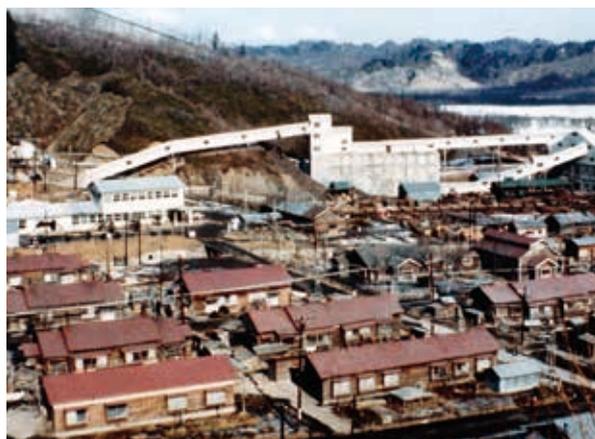


雄別炭砒鉄道 大曲選炭場

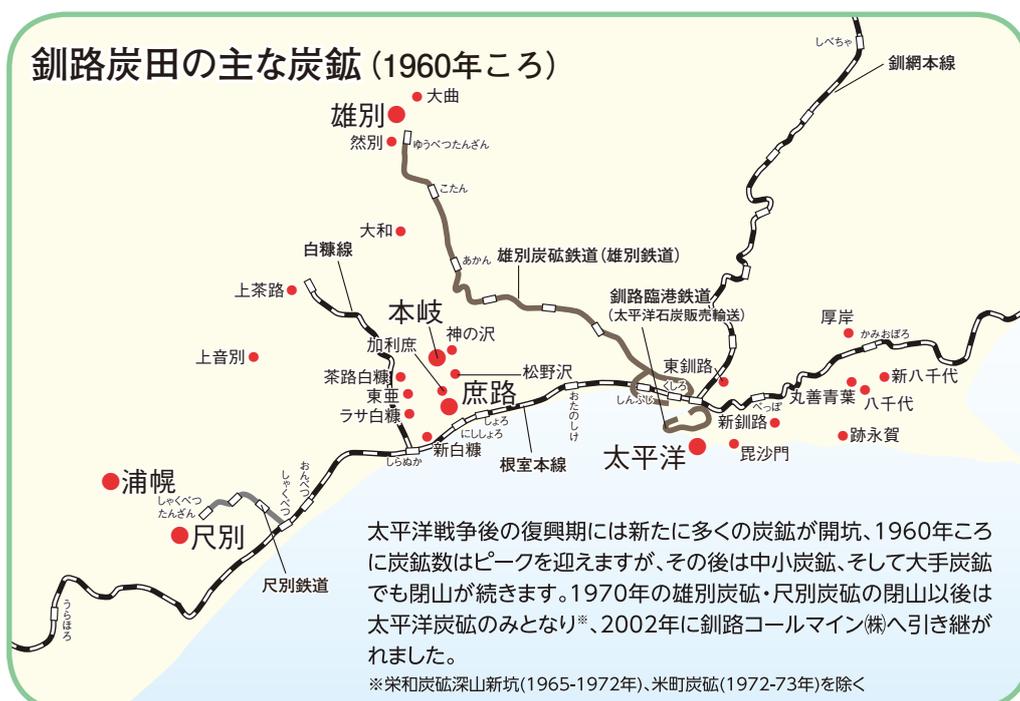
6 最盛期から縮小へ

戦後も、釧路炭田の各炭砒は経済復興のため石炭の生産を増加させていきますが、高度経済成長期となる1960（昭和35）年ころから日本国内では炭砒の閉山が相次ぎ、釧路炭田でも中小炭砒が1960（昭和35）年をピークに炭砒数は減少します。いっぽうで、1967（昭和42）年には釧路炭田全体での生産量が史上最高の年344.6万トン記録します。

しかし、大手炭砒も1964（昭和39）年に明治炭業庶路炭砒、1969（昭和44）年に明治炭業本岐炭砒が、1970（昭和45）年には雄別炭砒の雄別・尺別・上茶路の各炭砒が相次いで閉山、以降は太平洋炭砒のみとなります。



明治炭業 本岐炭砒（1960年代後半）



7 日本一の機械化炭鉱「太平洋炭砒」

太平洋炭砒は1960年代以降、機械化・高能率化へ「SD採炭」に代表される技術革新を進めます。1978年には年261万トン記録するなど、年200万トン以上の生産を続けます。また、安全を重視する社風、時代の変化に対応した労使関係を整えます。「持ち家制度」により炭鉱労働者の住宅取得を促進し、昔ながらの「炭鉱住宅」は姿を消していきました。

北海道は九州とともに石炭の主要生産地でしたが、その後閉山が相次ぎ、1995（平成7）年には道内の坑内掘り炭鉱はこの太平洋炭砒のみとなりました。



実用化初期のSD採炭（1970年ころ）

8 釧路の炭鉱技術は世界へ

先進的取り組みにより効率的生産を続けた太平洋炭砒も、国の石炭政策が終了する直前である2002（平成14）年1月に閉山します。しかし鉱区・生産量・人員規模を縮小し、生産を引き継ぐ新会社「釧路コールマイン」が新たに設立され、生産が継続されます。

現在も日本唯一の坑内掘り炭鉱として、年約25万トンの石炭を生産しています。その石炭は地元の火力発電所や、北海道内の工場などで使用されています。

あわせて、日本国政府による技術移転事業が、ベトナム・中華人民共和国・インドネシア・コロンビアなどを対象国として、安全や環境対策、マネジメントなどを中心に、この「生きた現場」で行われています。



環境にも配慮した選炭工場



コンテナスマイナーによる坑道掘道



2019年まで活躍した石炭列車（太平洋石炭販売輸送臨港線）

執筆：石川 孝織（釧路市立博物館）・福本 寛（田川市石炭・歴史博物館／③・④）

2023（令和5）年1月11日 発行：釧路市立博物館

〒085-0822 北海道釧路市春湖台1-7 museum@city.kushiro.lg.jp

協力：田川市石炭・歴史博物館



博物館Web

